

朝鮮植民者二世作家小林勝と「内なる懐かしさ」への抵抗

原 佑介

(立命館大学先端総合学術研究科博士課程)

はじめに 植民者二世と「内なる懐かしさ」

小説家小林勝は1927年、農林学校の生物教師の三男として、植民地朝鮮の慶尚道晋州に生まれ、敗戦の年の春に陸軍士官学校入学のため日本に移住するまで、16年間を朝鮮、主に大邱で過ごした。復員後共産党に入党し、朝鮮戦争反対闘争では逮捕と投獄を経験する。20代後半から創作活動を本格的に始めるが、1971年に日本で病死した。43歳であった。

彼が作家として活動した時期は長くはない。20代後半から死に至るまでのおよそ15年間である。1950年代後半の初期作品を見ると、芥川賞候補作となった「フォード・一九二七年」〔1956年〕をはじめ、植民地朝鮮を生きる日本人少年を主人公にした小説が目立つ。1960年代後半以降の晩年には、少年を主人公にした小説は姿を消し、戦後日本で植民地朝鮮の記憶に苛まれ続ける植民者二世の苦悩が描かれるようになる。その他後期の特徴としては、三一独立運動を題にとるなど、小林個人の生活史の範囲を越えた民族の歴史に対する関心の深まりが挙げられる。その死によって実現はしなかったが、最晩年の彼は、韓国併合や豊臣秀吉の朝鮮侵略に対する朝鮮の民衆の抵抗史を小説化する構想を抱くようになっていたという。

小林勝の最大のテーマは一貫して朝鮮であった。のみならず、彼は朝鮮のために共産主義に身を投じ、火炎壘を投げ、投獄されることとなった。文字通り朝鮮に生涯を捧げて戦後日本を生きた稀有な日本文学者であったといえる。在日朝鮮人二世の作家高史明は、小林勝の死後、彼について次のように記している。

実際、小林勝の中では、いつも朝鮮の山河と、その土地に生きる人々が生きつづけていたといえる。彼はその人々と山河を懐かしむ。わたしの知る限り、小林勝のように深い心を朝鮮に寄せている作家は、ほかには二人か三人だけである¹⁾。

小林勝が朝鮮を愛し、懐かしんだことは確かである。しかし彼は、いわゆる「引揚者」の多くが戦後日本で抱き、吐露した植民地への郷愁の情を、敢えて徹底的に自制し断罪する方向に進んでいった。晩年の小林は、植民者二世の朝鮮へのノスタルジアを主題にした小説を数編書き、エッセイの類でも盛んにその問題をめぐって持論を展開した。その成果は主に2冊の作品集にまとめられることとなった。そのうちの1冊であり、小林の最後の単行本である『朝鮮・明治五十二年』〔1971年〕は、死後に刊行さ

れた。同書の最終校正が終わった直後の急逝であったという。死の2ヶ月前に書かれた同書のあとがきに、晩年の小林の文学的課題が簡潔に集約されている。

この小説集の中には、朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとんだ、もしくは、いとなもうとした日本人が登場してくる。かつて、下積みの、平凡な日本人の多くがそうだったと思う。それらの人々、あるいはいま中年に達した、それらの人々の子供たちの多くが、二十数年をへだてた今、朝鮮を懐かしがっていることも知っている。

しかし、私は私自身にあっては、私の内なる懐かしさを拒否する。平凡、平和で無害な存在であったかのように見える「外見」をその存在の根元にさかのぼって拒否する。ことは過去としてうつろい去ったのでは決してないのである。敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない〔傍点原文〕²⁾。

敗戦時、70万を超える日本人植民者が朝鮮半島に居住していた。軍属を含めるとその数は100万人にのぼる。このように膨大な数を擁していたにもかかわらず、植民地朝鮮における日本人の歴史に関する研究は多くない。先駆的な研究として梶村秀樹の諸論文があるが、その中の一編〔1974年〕で彼は、「近代一〇〇年の日本庶民の生活史のなかで、朝鮮をはじめとする植民地でのそれは、研究者がまったく避けて通ってきた領域である」と述べている³⁾。梶村が慨嘆した状況は、30年以上が経過した現在も基本的に大きく変わってはいない⁴⁾。このことは、近代日本の朝鮮植民体験の集合的記憶が戦後急速に薄れ、忘却されていったことを間接的に示しているが、小林の文学はそのことと深く関わっている。

ここで、小林勝に関する先行研究を概観しておく。小林勝の研究が本格的に始まったのは、彼の死後であった。1970年代でとりわけ注目すべき研究は、安宇植による作家研究である。安は、「小林がもっとも早く在日朝鮮人に注目され、さらにまたいちばん共感をもって迎えられた作家の一人」であると指摘し、さらに、70年代にすでに韓国で反体制民主化闘争の一環として彼の作品の一部が翻訳されたという注目すべき事実に触れている⁵⁾。作家研究としては、安の研究の水準を上回るものは未だに現われていない。

作品研究についてであるが、小林の死後の一時期、特に彼が文筆活動の主な拠点としていた雑誌『新日本文学』で、その業績を検証する気運が盛り上がった⁶⁾。最初に小林の文学の全体像を大まかに提示したのは愛沢革である⁷⁾。1980年代初頭に、より精密な作品研究を行なった磯貝治良によれば、小林勝が形象化した朝鮮人は、金史良などが描いたような朝鮮人自身による朝鮮の民衆像に肉薄するものであり、小林は「見られる存在である日本人としての作者が、見る側の位置へ踏みこんで自己を照らそうとした」ほとんど唯一の日本人作家であった⁸⁾。さらに磯貝は、戦後日本文学史における小林の位置づけを試み、植民地朝鮮の問題が十分に描かれてこなかった中で、彼はこれに関して最重要の作家であると評価した。1990年代に入り、川村湊がそれまでの肯定的な評価に疑義を呈した。川村は、民族を代表して朝鮮人と向き合わざるを得ない日本人を描く小林の文学は朝鮮に対する抽象的な贖罪意識に縛られている、と批判した⁹⁾。しかしその後、高澤秀次や朴裕河が川村の批判的小林論を厳しく批判し、ポス

トコロニアルの視座から小林文学の復権を唱えた¹⁰⁾。2000年代でとりわけ注目すべき研究には、渡邊一民によるものがある。渡邊は、朝鮮を扱った近代日本文学の中で小林は特異な位置を占めるのみならず、小林の朝鮮をアルベール・カミュのアルジェリアと対比し、非西洋帝国としての日本の植民地観の世界的独自性を考える上でも小林の文学のあり方は示唆に富む、と指摘している¹¹⁾。このように、小林勝研究は作品研究が主流であり、作家研究はあまり深化していない。また作品研究についても、概説的なものが多い。本稿では、小林がなぜ植民者のノスタルジアを問題化するに至り、そのことにどのような文学的意義を見出していたのかという問題に焦点を絞ることとする。

一方、小林が少年期を過ごした大邱のある韓国の研究状況であるが、小林勝はほとんど知られていないのが現状である。2007年、李元熙が小林の代表的作品集『チョッパリ』を刊行した¹²⁾。単行本としてはこれが初の韓国語訳である。同書の公刊に際して特集記事を組んだ『文化日報』が、「彼は左翼系の作家ではあったが、これまで国内に紹介されなかったことを訝るほど」重要な作家であると指摘しているが¹³⁾、今後は日本のみならず、冷戦構造下で記述されてきた現代史の見直しが進んでいる韓国においても、植民地後に朝鮮問題に盛んに取り組んだ異色の日本人作家として小林勝の重要性は増していくと思われる。

とりわけ後期作品は、「私の内なる懐かしさを拒否する」という宣言を具体的に展開するために書かれたと言っても過言ではない。小林勝は、朝鮮を含む日本帝国の植民地で生まれるか自己形成期を過ごすかした日本人の中で、植民者の子という出自に最も執着して生きた文学者の一人であると思われる。本稿では、その後半生を戦後日本で生きた小林が、なぜかつての植民者たちが抱く朝鮮へのノスタルジアにかくまで拘泥したのか、植民地に対する素朴な、「無害な」郷愁の何を問題視したのかを考察する。

1 過ぎ去らない「遙かな過去」

小林勝は、生まれ育った土地が懐かしいという素朴な情とも、たとえば満州で自己形成期を過ごした安部公房のように故郷などそもそも存在しないという考え方とも異なる回路から、朝鮮をとらえ直そうとした。その朝鮮に対する感情には、複雑な陰翳が宿っている。彼は植民地への懐旧の情を単純な悪と見なして一方的に断罪していたわけではなく、また罪悪感一色に塗りつぶされていたわけでもない。

朝鮮へのノスタルジアを主題とした一連の作品群の中に、「音信十年」〔1969年〕という掌編がある¹⁴⁾。小林はすでに「無名の旗手たち」〔1962年〕を書き、軍人や官僚などのように統治に直接関わったわけではない一般の日本人植民者を植民地支配の尖兵だと喝破していたが、この作品には、朝鮮を懐かしむかつての植民者に対する小林の微妙な心の揺らぎが映し出されている。

主人公は小林自身とおぼしい植民者二世作家である。彼は、植民地朝鮮での記憶を共有している人々からの便りに、強い違和感を覚えていた。彼らが朝鮮の町々や旧友、教師たちなどのことをさも懐かしげに書き出しているからであった。「人々はそれを、すでに遙か以前に過ぎ去り、終ってしまった思い出として、心から懐かしさをこめて回想し、その懐かしさを当然ぼくも抱いているはずだと信じこんでいるばかりでなく、無意識のうちに彼等の懐かしさをもっともっと強くぼくに共有させようとしていた。するとぼくの心は一層冷えていくのだった。」

ある日主人公のもとに、小学校時代の教師吉岡喜重から暑中見舞いが届く。吉岡は、主人公が少年時代の一時期暮らしていた朝鮮の田舎町に、「京城」から赴任してきた新人教師であった。回想の場面で、それまでまったく知らなかったラグビーを突然やらされることになった晩秋の日のことなど、それほど多くも劇的でもない吉岡をめぐる逸話が二三語られる。ほどなくして主人公は大邱と思われる都市の小学校に転校する。転居先の近所に吉岡の実家があることを知った主人公は、母親に命じられてしぶしぶ帰省中の彼に会いに行く。軍服を着た入隊前の吉岡との再会は、少年に何の感興ももたらすことなく、そっけなく、またぎこちなく終わる。物語の中で吉岡は、主人公にとって特に印象的な教師だったわけではなく、戦後も便りがなければ思い出すこともないような周辺的な存在として描かれる。

返信しないまま時が過ぎる中、吉岡からの便りは続く。再会を申し出るものも含まれていたが、主人公は迷いながらも返事を出すことができない。それは、「教師という職業にありながら、あの戦争について、植民地というものについて、ほんのひとつことでも、ほんのかすかな暗示ですらも、教えてくれることのなかった人々と、逢う気にどうしてもなれないのだ」という反感のためであった。

最初の便りから10年が経過した後、南洋の戦跡をめぐる「姿のない声のない友と対面してきます」という吉岡からの便りを受けた主人公は、「比島戦では四十七万六千人が散華し、わたしの中隊でも百八十人中、生存者は十三名、わたし自身も七か所被弾、現在も三発の弾片を肉体に内蔵しています」という文面に衝撃を受ける。「吉岡喜重が返事一つ書こうとしない昔の教え子に、十年の間季節の便りを出しつづけたのは、決して植民地時代の遠い過去を懐かしもうとしていたのではなかったのだ、とぼくは思った。彼もまた、ぼくや級友や先輩たちと同じ運命をにない、それに耐えて、かろうじて生きてきたにちがいないのだ」と考えるようになった主人公が一人恥じ入る場面でこの掌編は幕を下ろす。

この作品では、植民地朝鮮の記憶をめぐる小林の問題意識が明瞭に表れている。問題の本質は、現在と断絶した「遙かな過去」として振り返るか、それとも現在とつながっている「今日」として対峙するかにあるということ、小林は示した。小林が郷愁を問題視するのはむしろ、朝鮮を「遙かな過去」のものとして突き放した上でとらえた場合のみにそれが生じるのだ、と彼が考えていたことによる。

晩年の小林は、植民地朝鮮は決して「すでに終わったもの、完了したもの、断絶したもの」ではない、と繰り返し主張した。作品集『チョッパリ』〔1970年〕のあとがきで小林は、彼がそのような考える契機となった出来事について回想している。自身が告白するところによれば、彼の文学の原点は、1952年、「朝鮮戦争反対・破壊活動防止法案反対」のデモで逮捕されて当時小菅にあった東京拘置所の独居房で感じた「ふるえだすような憤怒」であった。

そこで23歳の小林は、多数の朝鮮人共産主義者が大村収容所に収監されたのち韓国へ強制送還されていくさまを目の当たりにする。さらに彼は、朝鮮戦争の特需でよみがえる「日本資本主義」に、乾いて死にかかった蛭が朝鮮の血を吸って再び黒紫色に膨れ上がるかのような忌まわしきを見た。そうして、「朝鮮人に対する感度が少しも変わっていなかったこと、これからも変わらないだろうこと」を悟る。「その時に、私の内にあり、また、私の国の背負っている『過去』は過ぎ去り、完了した『過去』であることをやめて、現在そのものの中に生き、未来へつづいていく、生きて一つの総体の一部分となって私に迫りはじめた」と彼は振り返っている。

小林の唯一の書き下ろし長編『断層地帯』〔1958年〕は、朝鮮戦争反対の共産主義武装闘争をテーマ

にした政治小説である。愛沢革によれば、「小林の言う〈内なる懐かしさ〉、言いかえれば、故郷・朝鮮への否定することのできない輝かしい〈記憶〉をさえ、小林勝が作品世界の中で、〈拒否〉する」最初の作品である¹⁵⁾。その意味では、この作品は小林勝の文学を前期と後期に分ける分水嶺に位置するともいえる。

冒頭近くに、作者の分身である共産主義者北原が、映画館に立ち寄ってニュース映画を観る場面がある。「ニュースでは、必ず、北原がそこで生れ、そこで育った朝鮮の、禿げた山やポプラや広々とした田園や、悠々と流れる河がうつし出される。もっとも、一瞬の後には、ロケット弾やナパーム弾が炸裂し、煙があがり、藁ぶきの家が瞬時に姿を消してしまうのだったが、北原はそれを見る度に、故郷を眼の前につきつけられるような感動と、それが無惨に破壊される、体の中をひき裂かれるような苦痛を同時に感ずるのだ。」

戦火の朝鮮は、「遙かな過去」の中で自己完結している故郷としての朝鮮という幻想を粉碎した。自らが植民者二世として事実上君臨していた植民地時代は日本でも朝鮮でも終わっていないという認識から、小林はその文学活動を始めていくこととなるのである。

2 打ち碎かれた「人間信頼の卵」

1971年3月に腸閉塞でこの世を去ることになるのだが、小林勝は1966年2月から9月まで結核療養所で入院生活を送り、2度にわたる肺切除という大手術を経験する。翌1967年に発表された中編小説「目なし頭」は、かつての日本人植民者二世と在日朝鮮人の戦後日本におけるかかわりが最も多面的かつ執拗に刻みこまれている作品であるが、その内容はこの時の闘病体験を色濃く反映してもいる。長い入院生活に続く退院後の闘病生活の中で書かれたために、その心身両面の苦悩が引き起こす悪夢にうなされるような文体が散見される。ここからは、同作品において小林が植民地期の朝鮮人と戦後の在日朝鮮人をどのように関連づけて描いたのかを見ていきたい。

主人公は、手術後の肉体の不調と投薬の副作用から錯乱に陥っていく沢木晋という男である。沢木は植民地朝鮮で生まれ育った植民者二世だが、戦後は朝鮮戦争に反対する共産主義武装闘争に従事して投獄を経験し、病を得る前は小さな出版社に勤務していた。小林自身が手術後実際に体験したであろう内面の混乱が赤裸々に書きこまれており、全体として読みやすい作品とはいえない。しかし、語り口のいびつさそのものが、自虐的ともとれる激しい罪悪感や若干の反感が入り混じる小林の錯綜した対朝鮮感情の包み隠さぬ発現である、と見ることもできる。精神の混乱の克明な観察によって明らかになるのは、苦悩の核心にはやはり朝鮮体験があり、結局はそこにたどり着かざるを得ない、ということである。

「目なし頭」には、背景が異なる様々な在日朝鮮人が登場する。植民地支配の遺産である彼らの存在が、植民者二世として生きた自らの過去と、それとは一見断絶しているかのように見える戦後日本での生活とがつながっているという実感を沢木の心中に喚起する。そのやましがが発作の大きな要因となる。

埋没してしまう過去などというものはけっしてあり得ないということ、いくら人々から勝手に忘れられ、勝手に否定され、無視されようと「過去」は黙々と己れを保っているということ、一つの「過去」

は必ず、一つの「現在」のかたちをもち、まだかたちのない「未来」までも確実に持っていると感じたこと、そうしたことが沢木の全身に眼に見えない激動をよび起こしたのではないだろうか¹⁶⁾。

沢木の前に現れる、大抵の場合彼に強い緊張感や不快感をもたらす朝鮮人たちは、その「過去」が姿を変えた結果としての「現在」である。連続性が強調される沢木のこの時間感覚は、作中のある場面に象徴化して描かれている。

療養所を再訪した沢木は、医師から暗にもう走ることはできないと告げられる。学生運動でも共産主義闘争でも常に文字通り走り回っていた彼は、茫然自失の状態であてもなく林の中に分け入っていった。そして、林の奥でひっそりと建つ「腐朽した大きな木像の建物の群」を発見し、中で異様な光景を目にする。そこは、結核患者の臓器の標本で埋め尽くされた保管棟であった。沢木が偶然入った部屋では、「昭和十三年」というレッテルの貼られた壘詰めの肺や脳や腸が陳列棚に並んでいた。沢木は「不意に出現した昭和十三年の实在」に引きずりこまれるようにして、植民地朝鮮で生きた自らの「昭和十三年へ突然投げこまれ」ていくのであった。

沢木は農林学校の教師の息子であった。昭和13年の冬、子供たちにも戦争の気配が感じられるようになってきたころ、少年だった沢木には理解できない事件が起こる。「独立運動」に加担したという嫌疑をかけられ、雑務で学校に雇われていた李景仁という18歳の青年を皮切りに数人の生徒や卒業生が逮捕される。沢木少年は李景仁を慕っていた。「蝉をとってくれた。鬼やんまをとってくれた。氷櫃をつくってくれた。ふくろうの大きな巣を藁であんでくれた。ポプラの笛をつくってくれた。中華まんじゅうを市場でこっそり買ってくれた。毘で雲雀をとってくれた。魚の釣り方を教えてくれた。市場で干葡萄入りの朝鮮餅を食べさせてくれた。父も母も教えてくれなかったこと、知らないこと、禁止したこと、それを教えてくれたのは小使いの李景仁だ。」李景仁は、沢木少年ら日本人の子供たちが恐れ忌み嫌う同級生の李トショクの兄でもあった。トショクは流血など意に介さず、日本人と見れば高校生にも立ち向かっていくような乱暴者であり、沢木少年も幾度となく殴られたのであった。

李景仁は拷問にかけられ、それがもとで寝たきりの状態に陥る。その年の盛夏、沢木少年は母親に鶏卵を持たされ、「生きている人間を包んでいるとは思えないほどの、ぞっとするほど邪悪なおい」のたちこめる朝鮮家屋の奥に伏せる李景仁を見舞う。怯える少年の前に、やせ細った李景仁が姿を現す。

外見もおぞましく変わり果てた李景仁は、内面も別人になったかのように豹変しており、敵意をむき出しにして少年を冷たくあしらう。その態度が少年には理不尽としか思えない。少年期に植えつけられた「大人の世界」への不信感が、沢木の朝鮮観に独特の陰翳を落とすこととなる。

李景仁は、鶏卵を置いて早々に立ち去ろうとする沢木少年を呼び止め、「貰って食べようとはもう思わないよ」と、贈り物を断固として拒絶する。

「母さん、心配してるんだよ」

するとその男は白い眼をむき出して、彼をにらみ、冷たい笑いを浮べた。

「お前らが、何をいうか」

この時、沢木の小さな胸に、不意に憎悪が湧きあがった。李トショクが、そしてこの男が、耐え

きれないくらい憎い。彼が、子供の彼が、何をしたか。

日本人一般を指すこの「お前ら」という言葉の意味が、少年には理解できない。個人としては、少年は李景仁になついていたし、母親は善意から卵を贈ろうとした。憎むべきはむしろ少年から菓子や鉛筆を奪い、乱暴を働く李トショクのはずであって、自分や母親が李景仁に憎まれるいわれはない——それが少年の偽らざる実感であった。この植民者二世の具体的な生活空間と歴史的世界の決定的な裂け目が、李景仁の豹変を通して生々しく描かれる。李景仁が「棒切れのように醜悪な手」で新聞紙を広げ、卵を陽光にさらすのを見て、母親を侮辱されたように感じた少年の憎悪が臨界点に達する。

父母から、朝鮮人にむかって決して言ってはならぬと教えられたタブーを破る。胸の中で彼は思い切り叫ぶ、朝鮮人！ 鮮人！ くそつたれ！ 肺病やみ！ 共産主義！ 独立運動！ その裏切り者！ 恩知らず！ 死んでしまえ、鮮人！

沢木の胸の中でそれは言われた。しかし、その声を、その言葉を、その男ははっきりと聞いたにちがいないのだ。

その男は歯をむき出した。かえれ！ とせい一杯の声で言った。ぜいぜい言いながら細い手をのばした。卵を一つつかんだ。その手をそろそろと上へふりあげていく。彼が見たのはそこまでだ。

怒りと恐怖のあまり狂ったようにその場から走り去っていくところで、その忌まわしい追想は途絶える。沢木は無数の壇詰め臓器に囲まれたまま、突然襲いかかってきた過去の記憶に怯えるのであった。

李景仁は、その死の前に、子供の沢木の心の中の卵をうち砕いたのだ。人間について子供が抱いていた信頼と憧憬、それは李景仁が沢木の心の中につくり出した素朴で美しい人間信頼の卵だった。それを微塵に砕いて、子供の沢木にとって大人一般は決して存在しないこと、日本人の子供である彼には、日本人の大人があり、朝鮮人の大人があるのだということ、たとえどんなに親切で、優しく、それは何時でも、何時までもそういうものであるように見えてとしても、決して心を許してはならないこと、何時どんな場合に、その優しい大人が突然朝鮮人になるかわかったものではないこと、という子供にとっては余りにも強烈で残酷な考えをはっきりつきつけたのが李景仁だったのだ〔傍点原文〕。

朴裕河によれば、「小林の小説における『朝鮮』は、故郷として心惹かれる対象でありながら、『加害者』への憎悪を浴びせられたことで傷つけられた場所でもある。」小林勝は、日本人植民者たちの加害責任を内在的に最も激しく告発した作家であった。しかしそれと同時に、彼は植民者二世として、「少年が『少年』として『大人』によって傷ついた〔……〕その傷を癒すべき主体は誰かという問い〔……〕換言すれば、加害者の中の被害は誰が責任を取るのかという問題」からも目をそらそうとはしなかった¹⁷⁾。

こうした加害と被害の関係は、決して天秤にかけて軽重を量ればよいというものではない、と小林は考えた。日本の官憲の手によって無残に奪われた李景仁の命と、その李景仁によって打ち砕かれた沢木

少年の「人間信頼の卵」を、天秤の発想ではなく、別個でありながら互いに不可分に絡み合ったものとしてとらえ直し、そこから植民地主義の暴力の複雑な実相に迫ろうとしたところに、小林勝の文学の真髓がある。「目なし頭」の筆致ににじみ出る激しいおびえや逡巡は、朝鮮人の受けた苦しみに比べれば日本人の子供の心の傷など何物でもないという、当然予想されるとりわけ朝鮮人の側からの批判、そして時にはそれよりもはるかに苛烈な自己批判に、彼が常に向き合わなければならなかった、ということを示している。

李景仁は、小林勝にとっての朝鮮人を象徴する人物である。仲良く遊んでくれた彼に対する思慕の情、その彼の人生を蹂躪した支配民族の一員としてのやましき、そして少年や母親の素朴な、善意の、「無害な」愛情を侮辱する彼に対する反感と不信——これらが交ぜになった小林の朝鮮人に対する複雑な感情が、李景仁という人物に結晶化している。そして植民地時代に形成されたそのイメージが原形となり、戦後日本での小林の朝鮮人像をも規定することとなるのである。

3 懐かしさを禁じるもの

昭和 13 年の李景仁の幻影は、昭和 42 年の日本を生きる沢木晋に執拗につきまとう。ある日沢木は、近所に住む在日朝鮮人少年荷住男の悪質ないたずらに抗議するために、父親の荷次孝を訪ねる。住男は、学齢期に達したにもかかわらず父親の方針によって日本人小学校には行かず、陰険ないたずらを繰り返して近所の大人たちを困惑させていた。住男には植民地時代に沢木少年をいじめた李トショクのイメージが重なり合う。沢木は少年期に抱いたトショクへの憎悪を、なかば無意識的に住男に差し向けてしまうのであった。

住男のいたずらの被害を受けた沢木は、父親である荷次孝の監督責任放棄を非難する。しかし荷次孝はまともにとり合わず、逆に露骨に敵意を表わす。

「父親のあんたが日本人の学校へはやらんというのはいい。だけど住男ちゃんはほったらかされて、いたずらばかりするようになっているんですよ」

「日本人の学校には絶対やらない。おせっかいをするな！」

そう言ったきり荷次孝は沢木をにらんで黙り、もう帰れといわんばかりなのだ。荷次孝の姿がふくれあがって沢木にのしかかってくるように感ずる。その時沢木は、不意に三十年昔、李景仁が沢木にむかって投げつけた言葉と声をぞっとするほど生々しく思い出した。「お前らが、何を言うか！」するとそのかすれた声に荷次孝の声が重なった。「おせっかいをするな！」

こうして、父親の荷次孝が李景仁のイメージと重なっていくのであった。かつて沢木は、「樺太」から日本に「引揚げて来た」荷次孝が実は朝鮮慶尚南道の都市晋州近くの農村出身であったことを知って「懐かしさでいっぱいになり」、彼を訪ねたことがあった。晋州は作者小林勝の出生地である。しかし「荷次孝はあがれとも言わず、黙ってつつ立っているだけだったから、沢木は空しく引き返さなければならなかった。」これは小説でのエピソードに過ぎないが、小林が自らの郷愁を抑圧していく上でこれに類する

体験をした可能性は高い。

荷次孝との諍いの後、沢木晋は南玄男という謎めいた朝鮮人と出会う。南玄男は、朝鮮戦争当時「南のバルチザン」として米軍と戦っていたというのが、現在は古物商の店に住みこみで勤めていた。沢木は彼の素性を勘ぐって一人煩悶する。

南玄男の行きつけの朝鮮料理店に誘われた時、沢木は何気なく子供のころの思い出を語ろうとするが、慌てて思いとどまる。彼が話そうとしてやめたのは、次のように非常に具体的で生き生きした記憶であった。「ぼくは子供の時〔……〕市場で朝鮮人たちが、犬を味噌で煮てたべているのをよく見ましたよ、あれはゲエジャンというんですね、大鍋で丸ごと一頭ぐらぐら煮たてて、味噌と唐辛子とにんにくと葱をぶちこんで、しまい、犬の骨は小さくばらばらにほぐれてしまって、肉は鱧の鰭のスープのように糸のようになってしまって、湯気が朦々とたつて、そして、なんともいえないいい匂いがいっぱいその小さな店にたちこめるんですよ。すると遠くの村から野菜やなつめや川魚を市場へ運んで来た頑丈な男たちが、大きな真鍮のサバリへたっぷりゲエジャンをついでもらって、汗を流しながらむさぼるように食うんです。それをぼくは立って見ていたんだが、その男たちが羨ましくてたまらなかったんです。」

「目なし頭」に限らず、小林の文学作品は、食べ物や自然をはじめ、朝鮮の習俗、子供たちの生活世界、朝鮮人集落の日常風景など、子供の目に映った躍動感に満ちた朝鮮の描写が随所に見られる。その少年時代の記憶は、李景仁の惨死に象徴される植民地支配の厳しい現実を多く含むものでありながらも、素朴な郷愁を呼び覚ますことがむしろ当然といえるようなものであった。しかし彼はこれを自らに禁じた。戦後彼が実際に関わり合った在日朝鮮人の存在がその内的作用の大きな要因であったことが、「目なし頭」には克明に記されている。

植民地朝鮮に住んでいた日本人だとわかった時、日本に住んでいる朝鮮人が思想の如何を問わず同じような幾つかの反応を示すことを沢木は知っている。〔……〕植民地時代の朝鮮に生きた経験を多少でも持つ朝鮮人ならば、関心がないのではないかと思われるほど曖昧な顔つきになり、喜びや懐かしさや怒りとかいった表情を決して現わさない。表面的には、日本人の言葉にあいづちをうったりさえする。そしてこの無表情こそ、実は最もおそろべき表情なのだ。その奥には、話によってよび起こされた植民地朝鮮に生きていた自分の苦痛と、苦痛の原因であった日本人のその一人を眼の前にしたどうしようもない憎悪がたぎっているのだ。話を聞く朝鮮人の思想が進歩的であるか否か以前の、血の騒ぎなのだ。どうしようもない苦痛と憎悪との沸騰なのである。

南玄男と別れたあと沢木は、その「血の騒ぎ」の実例として、朝鮮戦争時に会った朝鮮人共産主義者金のことを思い出す。沢木と同じ日に逮捕され、獄舎でも裁判でもともに過ごした「同志」であった。数年後街頭で偶然再会した折、金は沢木にある告白をする。それは、金の胸のうちで密かにたぎっていた沢木に対する憎悪のことであった。「特にあの日本人はまだ子供だったのではないか、あの男がぼくの祖国で生れ、そこで育ったとしても、それはあの男が自分から選んだものではないではないか、あの男を憎むなんて、自分の思想、全世界の共産主義者の連帯精神に照らしてははずかしくないか、とぼくは自分自身を説得しようとしたが、公判で君の顔を見ると、もう駄目なのだ、君の中に君の朝鮮があり、

君が食べて成長した米と野菜と味噌と魚と肉は祖国の同胞が脂汗を流してつくり出したものだとすると、君自身の生命はおれたちの朝鮮で食べることでつくられてきたのだ、そんな風にぼくは感じて腹の底がふるえていたのだ。」

同志の口から漏れたこの告白に、沢木は衝撃を受ける。それは、朝鮮に負債を返したいと望み、「無謀だと知りながら党の軍事方針に従い、朝鮮戦争反対の非合法デモをやり、朝鮮人の小学生や中学生に警官隊が襲いかかるのを阻止しようとして火炎壘を投げつけて逮捕された」沢木の戦後を、根底から揺るがすものであった。

戦後「植民地とは一体何であるか」を理解し、朝鮮人に対して負い目を持っていることを自覚したものの、沢木の心中から李景仁やトショクを深く恨む思いは消えなかった。この葛藤のゆえに、彼は火炎壘闘争というなかば自虐的な贖罪行為に駆り立てられていった。それは贖罪行為であると同時に、自らのうちに宿った朝鮮人への憎悪をかき消そうとするもがきでもあった。しかし金の告白は、国際的な連帯を標榜する共産主義によってさえ、互いの胸で燃える「血の騒ぎ」を乗り越えることはできないということを沢木に突きつけた。

このような在日朝鮮人との出会いが、自己完結した故郷としての朝鮮像から小林を遠のかせたとと思われる。しかし、それは必ずしも小林の朝鮮への愛着をも奪うことにはならない。敗戦直後の高校時代、小林勝と寮生活をともにした齊藤孝は、次のように当時を回想している。「小林は雄弁であった。小林だけが気負いこんで一人でまくしたて、誰もその意気にのまれてしまった。一座を支配するのは、いつも小林であった。そして、気分の乗ったころ、小林はアリランとかトラジとかの朝鮮民謡に切り換える。寮内では、寮生が掃除や洗濯の際、よくアリランやトラジのメロディーを口ずさむようになった¹⁸⁾。」

このエピソードが示唆するように、日常生活の次元で小林は朝鮮を懐かしんでいなかったわけではない。むしろ大いに懐かしんでいたと見るべきであろう。しかし、小林の主人公たちは決して朝鮮の民謡を歌わない。日常生活で朝鮮の民謡を愛唱していたにもかかわらず、小林はその文学においては決してそのような姿の片鱗さえも見せなかった。ここには、文学者としての小林の自制が強力に働いているように思われる。こうして小林は、自らの記憶の中で生き続ける朝鮮の巨大で複雑なイメージの中の決定的に重要な部分を禁欲的なまでにそぎ落とした上で、ある意味できわめて不自然な朝鮮を描き、そのやり方を最後まで貫いた。彼は戦後日本での日常生活と、その中で想起する植民地朝鮮のイメージの重要な一側面、自らの朝鮮体験をより統一的に語るには不可欠な一側面を、敢えて捨象したのである。

このことは、朝鮮人そのものにも当てはまる。小林勝の小説に、植民地の影を帯びず、主人公に植民者の自覚を促さない朝鮮人はただの一人も登場しない。より簡潔に言い換えるなら、懐かしい朝鮮人は登場しない。小林が実際の日常生活で「アリランやトラジ」を愛唱していたとするなら、彼がまた朝鮮の風土を懐かしみ、そこで出会った人々の少なくとも幾人かを素朴に懐かしんでいたと考えることは的外れではないだろう。しかし彼はそのような朝鮮人を決して描かない。その小説世界の中で、こちらも向こうも日本人や朝鮮人である前に一人の人間である、というような関係は絶対に結ばせない。

李景仁は、一人の人間として温和な青年であったが、沢木少年には理解できない朝鮮人としての民族性を隠し持っており、それが逮捕と拷問で露出することによって、少年は彼から否応なく自らの日本人としての民族性を突きつけられる。それが植民地の現実であった。沢木と共産主義者金との関係に見ら

れるとおり、この現実が戦後も継続しているというのが、小林勝の基本的な認識である。後期の代表作「蹄の割れたもの」〔1969年〕で、植民者二世である医師河野が、「在日朝鮮人問題」に取り組む日本人大学生たちに向かって、心中で次のように問いかける場面がある。

朝鮮人にとっての日本人とは、一六世紀末豊臣秀吉による文禄・慶長の役以来の、征韓論以来の、江華島事件以来の、日清戦争以来の、日韓併合条約以来の、土地収奪以来の、いわゆる三・一万歳事件以来の、憲兵・警察・監獄網以来の、朝鮮語禁止以来の、「皇国臣民の誓詞」以来の、創氏改名以来の、強制連行以来の、強制労働以来の、それから朝鮮戦争と特需景気による日本産業復興以来の、その他もろもろ以来の、その総合的統一体としての日本人なのですよ、これと関係のない別の日本人というのは、一つの抽象であって、つまり、あなたが何時どこで、どんな朝鮮人とむかいあおうとも、あなたは、あなたによって代表される「日本人」という存在以外のなにものでもないのだというふうに自分を実感したことがありますか〔傍点原文〕¹⁹⁾？

この主人公の朝鮮人認識の根底には、「かつて、朝鮮人たちの中で、おれが河野という一人の中学生ではなくて、何時だって、何処でだって、河野という中学生によって代表される日本人という存在でしかあり得なかった〔傍点原文〕²⁰⁾」という自己認識がある。

これに対しては観念的との批判もあるが、小林は問題をむしろ逆にとらえていた。確かに、いかなる場合も日本人代表として朝鮮人と向き合おうとする小林の生真面目な姿勢が、一面では彼の小説世界に過度の重苦しさや閉塞感をもたらしていることは指摘できる。しかし、朝鮮人と向き合う場合には自分は日本人代表でしかあり得ないという痛切な実感を、彼はまず具体的な植民地体験からつかみとった。「目なし頭」で描かれた李景仁はその象徴である。そしてまたその実感は、戦後日本で、朝鮮戦争時に韓国へと強制送還されていく朝鮮人共産主義者たちや、継続する日本の植民地主義を告発する多くの在日朝鮮人文学者たち、それに市井の在日朝鮮人たちとの交流の中で繰り返しつかみ直してきたものでもあった。戦後日本を舞台とした小林の後期の諸作品は、このつかみ直しの過程の記録であるともいえる。上の引用にあるとおり、小林に言わせれば、民族や国家などの観念的な話の前に一人の人間として付き合い合う関係のほうこそ、よほど抽象的で傲慢な非歴史的感性の産物である、ということになる。

おわりに 「かつて植民者であり、いまも植民者である」

おそらく戦後に植民地朝鮮の問題に最も深く切りこんだ文学者の一人であり、自身も植民者三世であった詩人の村松武司は、小林勝の死後彼に関するエッセイを書いた。その中で村松は次のように述べている。作家小林勝に対するきわめて的確な理解であると思われる。

アルベール・メンミの言うように、植民者であり、同時に革命家である人間は存在しない。小林の場合、かつて植民者であり、かつて士官学校生徒であり、コミュニスト作家として死んだ生涯を、アルベール・メンミ流に言うならば「存在しない」人間というべきだろう。だから植民者、士官学

校生徒だったそのことと、コミュニスト作家であることとを、ふたつの非連続関係としてながめなければならない。非連続であれば、そういう人間は存在しうるからだ。

しかし、わたしがここで提出したいのは、はたして小林勝が非連続を自らに許したかどうか。士官学校生徒はともかくとして、植民者という過去を、彼の作家的生活をかけてどのように告白しつづけたか。それが日本の過去でなく日本の現在として、それが自分の過去でなく自分の現在として、ここにあるのを書きつづけたまれにみる作家ではなかったのか、という問いである²¹⁾。

村松武司の指摘したとおり、小林勝は決してその「非連続」を自らに許しはしなかった。だからこそ彼は「敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない」と主張し、また「私は私自身にあっては、私の内なる懐かしさを拒否する」と宣言し、それを最後まで貫き通したのであった。

ところで、平和と自由と民主主義を愛する戦後日本は、「非連続」の上に築き上げられた。「非連続」を自らに許すことで、旧植民地から見れば依然として植民地主義者であり、かつ自己認識の上では民主主義者である戦後日本は建設された。村松に倣って「アルベール・メンミ流に言うならば」、「存在しない」国と呼ぶべきであろうか。

戦後日本で様々に見られた「非連続」のうちの一つの典型であり、かつ戦後日本と植民地の関係を象徴的に表しているのが、植民者と「引揚者」の「非連続」である。藤原ていの『流れる星は生きている』に代表されるような「引揚」の記録の蓄積に埋もれる形で、戦後日本において植民者の姿はかき消されていった。「引揚」に先立つ植民地体験の記憶の代わりに、旧植民地からの脱出行の労苦に満ちた記憶が戦後日本に定着することとなった。植民地の傷跡よりもむしろ「引揚げの傷跡」が、かつての植民者たちを苦しめるようになった²²⁾。多くの植民者や軍人が敗戦下で味わった「引揚」体験、あるいはシベリア抑留体験の悲惨さそのものは、深く記憶されて当然であり、また戦後日本において共有、継承されてしかるべきである。しかしそれと同時に、植民者としての記憶の欠落が何を意味するかについて、再度問わなければならない。浅野豊美は、「植民」の歴史が「引揚」の記憶へと変容していく過程をたどり、これを「国民再統合の方法論」と指摘した興味深い論考の中で、次のように指摘している。

「植民」と「引揚」の記憶こそ、「加害」と「被害」の両者に直接対応するものであり、体験の次元では、同根でありながら異なる二つの記憶を形成している典型ということができる。つまり、「植民者」と「引揚者」という言葉が、実体として同じ人々を指している。にもかかわらず、その言葉には異なる記憶がこめられ、後者が社会的には圧倒的に有力な言葉となっている²³⁾。

小林勝の「内なる懐かしさ」の極端なまでの拒絶は、植民地帝国、軍事国家から「民主国家」、「平和国家」、あるいは「文化国家」へと急速に様変わりする戦後日本にあって、自らが植民者二世から「引揚者」へとすり替わっていくことへの違和感と抵抗の表明である。小林が徹底的に打ち砕こうとしたのは、たとえば同じ論考で浅野が引用している矢内原忠雄の1952年の論文に見られる次のような植民者観である。占領下の緊迫した状況下で民族の未来を模索した矢内原は、怒りを含んだ語調で書いている。「アジア諸地域に在住していた日本人が、戦争の結果として一掃的に退去帰国を命令された。それらの中に

は日本帝国主義の積極的推進者とみなされる者もいたであろうが、また永年平和的に居住してその地に生活の本拠をもち、住民と平和的關係において私的に生活してきた者も少ない²⁴⁾。」

小林勝はその文学において、植民地の「住民と平和的關係において」共存するような植民者は存在し得ないと断言した。小林にとって植民者とは、個々人の行為や思想の如何を問わず、その本質において絶対的に「日本帝国主義の積極的推進者」なのであった。このような小林の考えは、植民地に生まれつき、子供として生きた二世、三世をもその射程に入れていた。彼は戦後、植民者二世としての自らの存在の根源にまで遡ることによって、植民地との関係をとらえ直そうとした。

小林勝とはつまるところ誰であり、何のために文学者として生きたのか。その問いに対する最も簡潔な答えは、村松武司による次のような定義ではないだろうか。

小林勝は植民地生れの作家である。これをさらに言うならば、小林勝はかつて植民者であり、いまも植民者である。そのことへの闘いのために彼の作家的生活があった——と²⁵⁾。

広域植民地帝国が適度な大きさの民主主義国家へと、皇国臣民が為政者に操られた無辜の民へと、そして植民者が「引揚者」へと、旧植民地の側からすればあまりにもあっけなく変貌していく中、小林勝は死に至るまで植民者二世であり続けた。彼を植民者二世たらしめ続けたのは、戦後日本が忘却した植民地主義の傷跡膿む朝鮮と、その日本における具象である在日朝鮮人たちであった。

高史明は、「あの時代において、小林勝のように朝鮮を考えてくれた作家が、いったい何人いたであろう²⁶⁾」と嘆息した。一方、同じ植民者二世の作家後藤明生は、その小林が「目なし頭」でさらけ出したごちなさを「朝鮮コンプレックス」と揶揄した²⁷⁾。しかし小林の立場からするならば、むしろ戦後日本社会が「朝鮮コンプレックス」に陥らなかったことにこそ重大な問題がある。小林勝は、『『懐かしい』と言ってはならぬ』という言葉を遺言のように残して死んだ。植民地以後の時代に向けて投げかけられたその言葉はいまだ重い。

注

- 1) 高史明「小林勝を思う」『季刊三千里』1978年春号、73頁
- 2) 『小林勝作品集』5巻、319頁
- 3) 梶村秀樹「植民地と日本人」『梶村秀樹著作集』1巻（明石書店、1992年）193頁。在朝日本人に関する主な論文は同書所収。梶村の一連の研究のほかには、主なものに木村健二の『在朝日本人の社会史』、高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』などがある。植民者一世と二世以下の差異は重要だが、植民者二世の意識構造にまで踏みこんだものとなるとさらに少ない。わずかに尹健次「植民地日本人の精神構造」（『思想』1989年4月号。『孤絶の歴史意識』に収録）や高吉嬉『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成—旗田巍と朝鮮・日本』などで論及されている。
- 4) 尹健次『孤絶の歴史意識』（岩波書店、1990年）4頁、高吉嬉『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成』（桐書房、2001年）33頁参照。
- 5) 安宇植「小林勝と朝鮮」日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』（毎日新聞社、1978年）107-129頁
- 6) 『新日本文学』1971年7月号で、同時期に急死した斎藤竜鳳と併せて追悼特集が組まれた。
- 7) あいざわ・かく「想像力の基点としての〈朝鮮〉」『新日本文学』1973年11月号、41-47頁
- 8) 磯貝治良「照射するもの、されるもの」『季刊三千里』30号（1982年）178頁。同論文（同誌173-183頁）は、

- 小林の後期作品を論じたもの。併せて、前期作品を論じた磯貝治良「原風景としての朝鮮」『季刊三千里』29号（1982年）207-217頁も参照。
- 9) 川村湊「小林勝外伝」『満州崩壊』（文芸春秋、1996年）198-233頁
 - 10) 高澤秀次「小林勝論」『言語文化』17号（明治学院大学言語文化研究所、2000年）6-16頁、朴裕河「小林勝と朝鮮——『交通』の可能性について」『日本文学』2008年11月号、44-55頁
 - 11) 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮 文学的考察』（岩波書店、2003年）171-181頁
 - 12) 고바야시 마사루 지음, 이원희 옮김 “쪽발이” 도서출판 소화, 2007년. 訳者の李元熙は、小林勝の文学を概観した論文を發表している（이원희 ‘고바야시 마사루 문학에 나타난 식민지 조선’ “일이일문학연구”38호, 한국일이일학회, 2001년, 215-232쪽）。
 - 13) “문화일보” 2007년 7월 12일. 日本語訳は引用者。
 - 14) 小林勝「音信十年」『新日本文学』1969年8月号、6-13頁
 - 15) 愛沢草『『断層地帯』の故事新編』『小林勝作品集』2巻、464頁
 - 16) 『小林勝作品集』4巻、173-174頁
 - 17) 朴裕河「小林勝と朝鮮」『日本文学』2008年11月号、52頁
 - 18) 斉藤孝「小林勝と朝鮮——一つの思い出」『季刊三千里』1984年秋号、14頁
 - 19) 『小林勝作品集』第4巻、29-30頁
 - 20) 同書、17頁
 - 21) 村松武司「植民者作家の死——小林勝について」『朝鮮研究』1972年3月号、45頁
 - 22) 藤原てい『流れる星は生きている』（中央公論社、1976年）298頁
 - 23) 浅野豊美「折りたたまれた帝国」細谷千博他編『記憶としてのパールハーバー』（ミネルヴァ書房、2004年）275-276頁
 - 24) 『矢内原忠雄全集』20巻（岩波書店、1964年）13頁
 - 25) 村松前掲書、41頁
 - 26) 高史明前掲書、74頁
 - 27) 後藤明生「グロテスクな〈記憶〉」『文芸』1970年7月号、207頁

参考文献

小林勝『小林勝著作集』全5巻（白川書院、1975-1976年）

- あいざわ・かく「想像力の基点としての〈朝鮮〉——小林勝論・序説」『新日本文学』1973年11月号
- 浅野豊美「折りたたまれた帝国——戦後日本における『引揚』の記憶と戦後的価値」細谷千博他編『記憶としてのパールハーバー』（ミネルヴァ書房、2004年）
- 『帝国日本の植民地法制』（名古屋大学出版会、2008年）
- 安宇植「小林勝と朝鮮」日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』（毎日新聞社、1978年）
- 磯貝治良「原風景としての朝鮮——小林勝の前期作品」『季刊三千里』29号（1982年）
- 「照射するもの、されるもの——小林勝の後期作品」『季刊三千里』30号（1982年）
- 『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』（大和書房、1992年）
- 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勤草書房、1971年）
- 川村湊「小林勝外伝」『満州崩壊——「大東亜文学」と作家たち』（文芸春秋、1996年）
- 梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編『梶村秀樹著作集』1巻（明石書店、1992年）
- 木村健二『在朝日本人の社会史』（未来社、1989年）
- 高吉嬉『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成——旗田巍と朝鮮・日本』（桐書房、2001年）
- 高史明「小林勝を思う」『季刊三千里』1978年春号
- 後藤明生「グロテスクな〈記憶〉」『文芸』1970年7月号
- 斉藤孝「小林勝と朝鮮——一つの思い出」『季刊三千里』1984年秋号
- 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書、2002年）
- 高崎隆治『文学のなかの朝鮮人像』（青弓社、1982年）
- 高澤秀次「小林勝論——植民地朝鮮の日本人」『言語文化』17号（明治学院大学言語文化研究所、2000年）
- 成田龍一「『引揚げ』と『抑留』」『岩波講座 アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争体験』（岩波書店、2006年）
- 朴裕河「小林勝と朝鮮——『交通』の可能性について」『日本文学』2008年11月号

村松武司「植民者作家の死—小林勝について」『朝鮮研究』(1972年3月)

尹健次『孤絶の歴史意識』(岩波書店、1990年)

渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮—文学的考察』(岩波書店、2003年)

고바야시 마사루 지음, 이원희 옮김 “쪽발이” 도서출판 소화, 2007년

이원희 ‘고바야시 마사루 문학에 나타난 식민지 조선’ “일어일문학연구” 38호, 한국일어일문학회, 2001년

【2010年1月29日 レフェリーの審査を経て掲載決定】